

東光原

熊本大学附属図書館報

Kumamoto University Library Bulletin, No.8, June 1994

パリの大学図書館を利用して
シリーズ熊本大学附属図書館蔵特殊資料紹介7
重要文化財 阿蘇家文書 (34巻36冊)

新情報物流システム試論
— 長期研修報告に代えて —



(沖縄風俗絵巻より)本文に解説

パリの大学図書館を利用して

松崎 晋

私が、文部省在外研究員として、パリへ向かったのは一昨年12月初めのことで、昨年10月初めに帰国するまで、10カ月間のパリ滞在でした。私が、滞在したのは、パリ第7大学、固体物理グループのM. ショット教授の研究室で、電導性ポリマーの物性について研究するのが目的でした。パリの大学制度は、1960年代の大学紛争に端を発する大学改革によって、それまでの名称が変更され、第1から第13までのナンバーで呼ばれるようになっていきます。たとえば、文科系の大学として有名なソルボンヌ大学は、パリ第3大学と呼ばれています。私が滞在した第7大学は理科系の大学で、同じ敷地内にもう1つの理科系大学である第6大学と同居していますが、中には2つの大学が同居している建物さえあって、私にとっては、ちょっとめずらしい建物構成でした。

私は、研究のためにおもに2つの図書館（あるいは図書室）を利用していたので、そのとき感じた印象を書いてみたいと思います。その1つは、固体物理グループの専用図書室で、もう1つは化学系の研究用図書室です。私の専門は物理化学、つまり物理と化学の境界領域で、両分野の雑誌や単行本を参考にする必要があります。固体物理グループの図書室は、ちょうど熊本大学の理学部物理学科の図書室と同じくらいの規模であり、物理関係の雑誌と単行本を中心にそろえてあって、おもにグループ内部の研究者と学生が利用しています。化学系の研究用図書室は、第6大学と第7大学の両方の研究者と学生がおもに利用するための化学系総合研究図書室ですが、他の大学からも多くの利用者が来ているようです。ここには、約200種の化学系雑誌と7000冊以上の単行本をそろえてあり、フランスでもっとも充実した化学系図書室だということでした。私が必要とする化学系の雑誌はほとんどそろっていたので、この図書室は非常に利用価値が高いものでした。また、研究専用の図書室であるため、学部学生が試験準備のために使うようなこともなく、静かな環境で、調べ物に専念できるのありがたいところでした。書架はすべてオープン式で、利用者は自由に見ることができて、単行本は3週間まで借り出すことができます。雑誌や叢書類は貸し出し禁止で、このへんのシステムは

日本の大学図書館と変わらないといえます。夜間も8時ぐらいまで開いていて、学生アルバイトが係りとして働いていました。

熊本大学の図書館と比べてもっとも違いを感じたのは、文献をコピーするときの便利さです。熊本大学においては、とくに校費でコピーするとき、いちいち申込書を書かなければならないので、面倒くさいと感じることがあります。パリ大学の図書館はすべてプリペイドカード方式になっていて、あらかじめテレホンカードのようなものを買っておけば、あとはそのカードを機械に入れるだけで自由にコピーできて、非常に便利でした。校費の場合も、研究室であらかじめカードを購入してあるので、なんの面倒もないのです。価格的にも、コピー枚数100枚用のカードの値段が70フラン（約1400円）ですから、1枚あたり14円ぐらいで、日本と変わりません。この方式は、熊本大学でも取り入れるべきだと思いました。ただ初めてコピーしたときにおもしろいと思ったのは、機械が全部日本製だったことです。図書館員の話では、日本製がもっとも優秀だということで、ちょっと鼻が高かったのですが、私が「日本の大学ではゼロックスをおもに使っている」というと、不思議そうな顔をしていました。

もう1つ便利だと思ったのは、パソコンを使った文献の検索システムで、フランスじゅうの大学図書館の文献を調べることができます。必要ならばコピーもパソコンを通じて依頼することができて、2～3日で届けてもらえるのです。同様なシステムは日本でも普及し始めていますが、まだ手続きの上で手間がかかるようで、より簡便なアクセスの方法を考える必要があると思います。ほかの国のシステムを参考にして、自分の国のシステムを改良するというのは、今さかんにいわれている国際化の1つでしょう。ぜひ、学生や職員がより便利に利用できる図書館にしていきたいと思っています。

（まつざき すずむ 理学部助教授 化学）

シリーズ熊本大学附属図書館蔵特殊資料紹介7

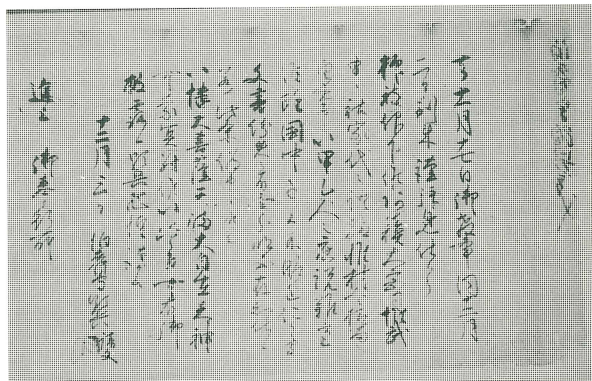
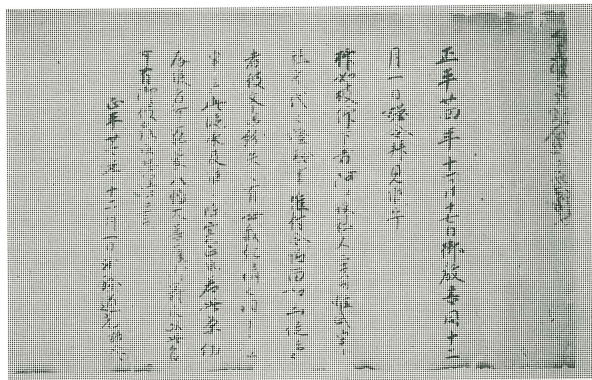
重要文化財 阿蘇家文書(34巻36冊)

工藤敬一

恩賞への不満を持ちながらも、南朝側（宮方）の武将として生涯を送った阿蘇大宮司恵良惟澄は、最晩年には庶子の八郎二郎を代官（名代）に登用していた。一方嫡子の惟村は、貞治元年（正平17=1362）には、大友氏時の推挙を受けて室町幕府から肥後の守護に補任されるなど、かねて武家方として活動していた。惟澄は死期の近いことを覚った時、一族の将来を考え嫡子の惟村を後継の惣領に立てた。惟武はこれを不服として一族中の支持者をたのんで反抗の動きをみせた。惟澄は惟武の逆心を責め、正平19年7月10日、大宮司職と本末社領や他国の所領、それに綸旨・令旨以下の重代の文書を惟村に譲って間もなく死去した。惟武は10月15日惟澄の遺跡安堵を大宰府征西府に求め、翌年3月28日、惟武を大宮司とする懐良親王の令旨が出された。一方惟村は当然父の譲りの正当性を主張し、貞

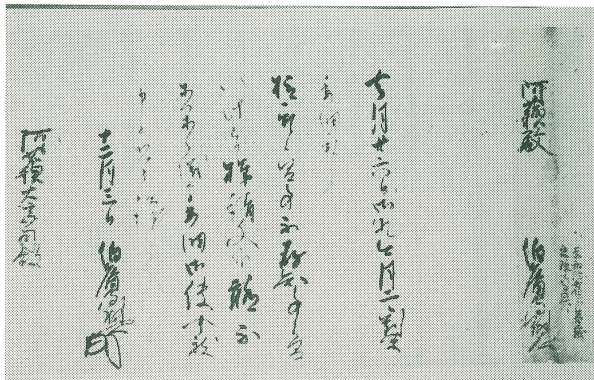
治6年（正平22=1367）10月25日、二代將軍足利義詮から大宮司職と神領の安堵をうけた。こうして阿蘇大宮司家は宮方、武家方の二つに分裂し相争うことになった。

今回紹介する文書は、惟村が社家代々の證驗（證文）を抑留している、という惟武の訴えを受けて、征西府が肥後の有力勢力である宇土の宇土道光と八代の名和顯興に、その実否を尋ねたのに対する両人の回答である。このような調査命令に対する回答を請文といい、それには、もし偽りを申したなら八幡大菩薩や天満天神の神罰を受ける、という「起請の詞」を付けるのが、当時の慣しであった。そしてこのような請文は、多く自筆で書き署名の下に「請文」と記し、花押はその裏面に書いた。これを裏花押という。裏に書くのは「裏書きする」という言葉からもうかがわれるように、間



[A] 宇土道光請文
（端裏書）
 [宇都喜岐入道々光請文]
 正平廿四年十一月十七日御教書、同十二月一日謹令拝見候畢、抑如被仰下者、阿蘇社大宮司惟武申社家代々證驗事、惟村令抑留加凶徒云々者、彼文書紛失之有無、載起請之詞可注申云々、此段承及候之條實正候、若此条偽存候者、可罷蒙八幡大菩薩御罰候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、
 正平廿四年十二月一日
 沙弥道光 請文（裏花押）

[B] 名和顯興請文
（端裏書）
 [伯耆守顯興請文]
 去十一月十七日御教書、同十二月二日到来、謹拜見仕候了、抑被仰下候阿蘇大宮司惟武申社家代々證驗、惟村令抑留之由事、以甲乙人之廣說難言上候、雖國中事候、不眠近仁候之間、文書紛失之有無、分明不存知仕候、若此条偽申候者、八幡大菩薩、天満大自在天神可蒙冥罰候、以此之旨可有御披露候、顯興恐惶謹言、
（正平廿四年）
 十二月三日 伯耆守顯興（裏花押）
 請文
 進上 御奉行所



[C]
 名和顯興書状
 (折封ウハ書)
 「阿蘇殿 伯耆守顯興」
 去月廿六日御札、今月二日到来、委細承候了、
 抑承候間事、不存知事候間、以此旨捧請文候、聊不閑之儀候、委細御使可被申候、恐々謹言、
 (正平廿四年)
 十二月三日 伯耆守顯興(花押)
 (惟武)
 阿蘇大宮司殿

る点が面白い。そして顯興の請文の末尾は、「顯興恐惶謹言」と結ばれている。このように文中に指出人の名前をいれるのは大変丁寧な書き方である。その上顯興は惟武に対し、「知らない」と返事したことについて、「聊も等閑の儀」ではないと申し開きの書状を送っている [C]④。顯興は随分と気を遣っているのである。道光と顯興の惟武や征西府に対するスタンスの相違など、いろいろ検討の余地はあるが、ここでは立入らない。

なお [C] は別として、征西府の御奉行所に対する回答である [A]・[B] はどうして阿蘇家文書として伝来したのであろうか。おそらく兩人に回答を求める征西府からの御教書は惟武を通じて伝達され、その回答もまた惟武を通して提出されたのではなかろうか。それは [C] に「去月廿六日の惟武の御札、今月二日到来」とあり、[A]・[B] にも「去十一月十七日の征西府の御教書、同十二月二日到来」とあることから察せられる。請文を受けとった惟武が、写を作って征西府に提出したか、直接征西府に披露したかは不明であるが、このように見れば、征西府宛の請文である [A]・[B] が阿蘇家に伝来した事情も理解できるであろう。

違いない、という意味が込められているのである。ところでこの二通を比べてみると、道光は惟村の抑留の事実は間違いないとしているが [A]、顯興は廣(荒)説(噂)では何とも言えない、自分はそれほど親しい間柄ではないので実否は知らない [B]、としてい

④「大日本古文書」は [C] の(折封ウハ書)について、「或ハコノ文書ノモノニアラザルベシ」とし、さらに宛名についても「コノ一行後人ノ加筆ニカ、ル」と註記している。たしかに筆跡上若干の疑問があり、なお検討の必要を感じているが、後考に委ねたい。

(くどう けいいち 文学部教授 国史学)

新情報物流システム試論

— 長期研修報告に代えて —

浦田博臣

1. はじめに

いま、大学図書館は情報発信基地への転換が求められているという。

わたしは、そこにハブ空港のイメージを重ねてみた。

それは、長い旅の果てにおかれた到着点ではなく、学術情報がそこから分岐し、次の地点をめざすための新たな出発点というイメージである。

しかし、熊本大学においてそのイメージどおりに情報を発信しようとする、はなはだ困ったことには、いわゆる基地機能の中の、基本的で極めて重要な部分

がまだ整備されていないことに気づかざるをえない。

そこで、これからその問題について検討し、できれば、現時点におけるひとつの解答を示してみたいと思う。

2. 問題点 — モノのやりとりをどうするか —

(1) ふたつの情報流通

熊本大学が新制大学として発足してから、すでに半世紀近くを経、学内外の教育研究を取り巻く環境は大きく変貌しつつある。

とりわけ、学内LANの整備に代表されるコンピュータ・ネットワークの発達、研究者間の学術情報のやりとりを容易かつ迅速にし、それによって、教育研究のあり方自体を変化させるのではないとも言われている。

このことを、学術情報の流通に深く関与している図書館の立場から見たときに、次のような見解を導き出すこともできるのではないか。

すなわち、電子化された学術情報の流通については、未来へ向けてのひとつの方向性がすでに与えられているのである。

ところが、それに対して電子化されていない、大きさと重さをもったモノとしての学術情報の流通については、まだ具体的で明確な方向性は与えられていないように思われる。

たとえば、OPACなどによって、必要な図書がある研究室に置かれていることが判明したときなどに、その図書をすぐに簡単な手続きで利用できるような環境が、熊本大学では整えられているだろうか。

あるいは、図書館における整理作業が完了した資料を、研究者の手元に届けることが速やかに行われるように、熊本大学ではシステム化されているだろうか。

かつて、こういった問題を解決するための方策として、集中化が声高に叫ばれたことがある。

もちろん、集中化もひとつの極めて有効な解決策である。

しかし、熊本大学を含めさまざまな大学での取り組みにもかかわらず、現実には集中化は遅々として進まない。

なぜか。

逆説的だが、その原因のひとつがこの問題自体にある。

つまり、研究者にとっては、必要なときに必要な資料が手の届く所にある、という状態が最も望ましい状態なのだが、集中化によってそれが困難になるのではという懸念が、手の届く所＝研究室から図書館への資料の移転を阻む最大の要因になっていると考えられるのである。

とすれば、その懸念を何らかの方法で払拭することが、集中化の進展のためにはまず必要だということになる。

そして、あえて結論的に言えば、その方法こそ先行する電子情報流通システムに対応する形での、モノとしての学術情報の流通システムの整備なのである。

このシステムが整備されることによって、集中化の

内容も深化し、学術情報の適正な配置という、より幅広いテーマを考察する可能性も生まれるだろう。

その意味からも、あるべき流通システムの具体的で明確な方向性を、早急に示す必要があると思う。

(2) 実務レベル

熊本大学附属図書館は、7学部および1短期大学部を対象とするサービスを、中央館および医学・薬学の両分館において行っている。

そのサービスには、実にさまざまな形態がある。

ここで、図書の購入を例にとりて細かく説明すると、次のようになる。

図書の購入

①まず、研究者が研究に必要な図書について、図書請求書という用紙に記入する。

②次に、教室系職員が図書請求書を図書館の購入担当係に提出する。

③購入担当係は、図書請求書に基づいて書店に発注する。

④書店から図書が到着すると、購入担当係は支払いの後図書を目録担当係に渡す。

⑤目録担当係は目録作成の後図書を教室系職員に渡す。

⑥教室系職員が図書を研究者に渡す。

また、外部から文献複写依頼がきた場合を例にとると、次のようになる。

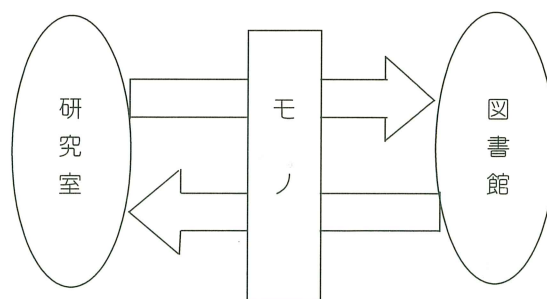
文献複写

①まず、文献複写担当係は、依頼された資料の所蔵場所を調査する。

②次に、所蔵場所（研究室）に文献複写担当係が行って、資料を借用する。

③資料を図書館に運んで複写し、依頼した図書館に送付する。

④資料を所蔵場所に運んで返却する。



さて、以上のふたつの例からも明らかなように、図書館のサービスは重要な部分を人手に頼っている。

しかし、人手に頼っている部分をよく見ると、もともと性格の違うものが組み合わされて、成り立っていることがわかる。

それは、図書の購入の場合では、図書を必要とする研究者や図書の購入などを行う図書館の担当係に対して、書類や図書の運搬を行う教室系職員という、役割(あるいは仕事)の違いである。

また、文献複写の場合では、文献複写を担当するひとつの係が、依頼に応じて資料を複写し送付するという本来の業務と、資料を運搬するという副次的な業務の両方を処理しているが、ここでも仕事としての性格の違いは明らかである。

つまり、どちらの例でも、図書館固有の業務プラス副次的な運搬業務という形で図書館サービスが成立しているのである。

したがって、こういった種類の図書館サービスのあり方に対して何らかの改善が必要になったときには、この点に着目すべきだということになる。

もちろん、適確な図書館サービスが十分に行われているなら、現行のシステムでも問題はない。

もしも、問題が生じるとするなら、何らかの理由で適確な図書館サービスができなくなるか、逆に、より高度な図書館サービスを求められた場合だろう。

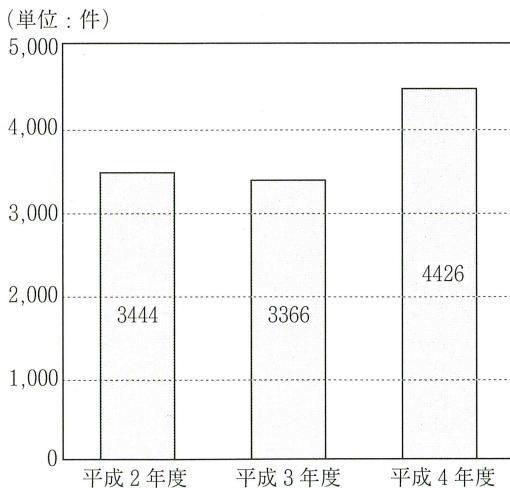
そして、熊本大学附属図書館において、現在、まさしくそのような形で問題が生じているのである。

一例を挙げよう。

図は、ここ三年間の医学部分館における(学外から依頼された)文献複写処理件数をグラフ化したものである。

ご覧のとおり、平成4年度からの学術情報センターのILLシステム開始による処理件数の伸びには驚くべきものがある。

文献複写統計(学外からの受付)



これは、ILLシステム評価および図書館サービス活性化の面から言えば、まことに望ましい姿であり、嬉しいことでもある。

ところが、反面この伸びは、実務レベルにおける負荷の増大を示すものでもある。

つまり、担当者にとっては、ある一定量まで(それがどれくらいの量か分からないが)仕事が増え続けた後、その状態が維持されるということを意味する。

仕事が増え続けるということは、文献複写の場合、先に述べたとおり、図書館と研究室の間を往復する資料の量と、回数が増え続けるということである。

そして、実際に往復するのが、(当然、)担当者自身であることから、担当者が図書館にいないという現象がしばしば起こるようになる。

通常、文献複写を担当する係は、よほど大きな大学図書館でない限り、貸出返却・情報検索・利用指導など、複数の重要な業務をあわせて担当している。

そこで、文献複写の担当者が席を外している間は、残った他の係員だけで係の業務全般を処理しなければならないというわけである。

(ついでに、こういった影響は他の係にも及ぶということ、小規模な図書館ほど影響が大であるということ、図書館以外においても同様の現象が起きているということに留意していただきたい。)

これで、はたして従前どおりの図書館サービスを将来にわたって提供し続けることが可能だろうか。

さらには、ネットワークによって加速されつつある電子情報の[流通速度]に、図書館サービスのそれに対応させていくことが可能だろうか。

やはり、実務レベルにおいても、何らかの改善策が模索されるべき時代が来ていると見なければならない。

(3) 目標の設定

ここで、モノとしての学術情報の流通システムを整備し、図書館サービスのあり方を改善するということを、当面の目標として設定したい。

そして、その目標は以下のような条件を備えていなければならない。

①高速化が図られること。

やりとりがより速く行われるようになること。

郵便配達や宅配便のレベルには、少なくとも達することが必要である。

②確実性が向上すること。

より確実に相手方に届けられるようになること。

そのためには、流通状況が何らかの手段で、確実に把握されていないといけない。

③個別化が図られること。

学内LANによって、電子情報が個人レベルでやりとりされることに対応する形で、可能な限り個別に行われるようになること。

④広域的であること。

学内の機関すべてが対象であること。

モノのやりとりが問題である以上、ひとつの図書館やひとつの部局というレベルでは解決できないことも明らかである。

また、先に述べたとおり、この問題の本質が新たな研究教育基盤の整備にかかわることから、全学的に取り組むだけの価値があるということも確かである。

⑤経済的であること。

コストパフォーマンスが高いこと。

問題の性質上、経常的な経費によって賄われるべきものであり、予算的に[軽い]システムであることが望ましい。

上記の目標を達成するために、わたしが有効ではないかと考えているひとつの案を、簡略な形ではあるが、示したいと思う。

それは、新情報物流システム(仮)の構築である。

3. 新情報物流システム

(1) 学術情報

学内における学術情報の新しい物的流通システム=新情報物流システムを考える際に、対象とするモノとしての学術情報の範囲を決める必要がある。

新情報物流システムが扱う[学術情報]は、学内において流通しているさまざまな情報から(オンラインで流通する)電子情報を除いたものである。

たとえば、図書・雑誌・印刷物、庶務・会計・学務関係等の各種の事務文書、出力された実験結果やその他の研究資料などがあげられる。

つまり、新情報物流システムが対象とするのは、これまで図書館が取り扱ってきたような情報だけではなく、大学全体を流通している情報なのである。その理由は、システム自体の効率化をはかるためである。

(2) 情報流通係

そういった情報物流を取り扱うのは、当然、それを専門にする課または係=情報流通係(仮)である。

この情報流通係が行う仕事は、新情報物流システムの管理・運営である。

したがって、情報流通係は図書館内に設けられるとは限らない。

むしろ図書館外である可能性の方が高いだろう。

そして、情報流通係が新情報物流システムの管理・運営を行うことで、情報物流の学内における一元的コントロールが可能になる。

一元的にコントロールすることが必要なのは、それによって初めて情報物流のシステムが合理化されるからである。

(3) 特殊情報

しかし、情報物流を一元的にコントロールするといっても、そこには当然例外がある。

たとえば、特に緊急を要するような書類や、限られた人間以外手を触れてはならないようなモノについては、それなりの方法を別に考えるべきだろう。

いいかえると、そのような特殊なものを切り離すことも、情報物流のシステム合理化の一環である。

(4) 学内郵便番号制

新情報物流システムでは、取扱いの簡便化のために学内郵便番号制(仮)を採用する。

それは、地区、部局、学科、講座、研究室、係、課、役職、個人名等の要素を体系的かつ合理的に組み合わせたものであり、できるだけ(視認しやすくするためにも)短いものであることが望ましい。

また、OCRやバーコードについても、それが最も効果的と判断されるなら、当然、採用されるべきである。

(ついでにいえば、現在既に使われている各種のコードとある程度の共通性を保つことも望ましいが、それによって、拡張性に欠けるなどの不合理な面が生じる場合はあまりこだわらべきでない。)

この学内郵便番号制によって、より確実に、より個別に学術情報をやりとりすることが可能になる。

(5) 業務委託

新情報物流システムは、外部業者への業務委託を前提にすべきである。

それによって、教室系職員や担当係員が運搬業務から解放され、ムダな時間がなくなり、本来の職務に専念できることで、時間の有効な利用ができるという利点がある。

経営面からいっても、情報物流というある意味で熟練を要しない仕事のために、貴重な人材を割くことは避けるべきだろう。

(6) 情報ポスト

新情報物流システムがモノのやりとりを行うものである以上、情報物流ネットワークのどこかで、ヒトからヒトへの受け渡しが行われなければならない。

そこで必ず問題になるのが、受け取るべきヒトの不

在である。

理由はいろいろあげられるが、[取りに行くのがめんどう]と感じるヒトとモノの距離に最も大きな原因がある。

これを解決するには、適当な場所に受け渡しのための情報ポストを配置して、ヒトとモノの距離感を適切なものにする必要がある。

ただし、情報ポストの配置は、より速くより確実により個別的にという新情報物流システムの目的を満たすため、場所の選定や数の決定が慎重に行われなければならない。

4. おわりに

熊本大学附属図書館が、真の情報発信基地として再

生するために克服しなければならない問題は多い。

今、その中のひとつの問題に対するひとつの解答案として、新情報物流システムの要点について述べたが、システム全体のダイナミズムについて伝えることができたか、はなはだ心もとない。

しかし、紙数も尽きたので、現在行われている受け渡しボックス方式と、わたしの提案する情報ポストを混同されないことがないように願って、結びの言葉としたい。

[*本稿は、平成5年度大学図書館職員長期研修修了後、与えられたテーマにしたがって提出を求められたレポートに加筆補正したものである。

貴重な知識と体験が得られたことに対して、関係各位に深く感謝の意を表したい。]

(うらた ひろおみ 医学部分館整理係長)

沖縄風俗絵巻をLD化

このたび附属図書館所蔵の「沖縄風俗絵巻」が放送教育開発センター菊川 健教授のご協力によりLD(レーザーディスク)化されました。

この絵巻は幅30cm、長さ20mに首里城から終わりの洗骨の図まで約60シーンに約350名の人物を描いた色彩豊かな一大スペクタクルです。文学部民俗学安田宗生先生の解説付で大変分かりやすく、時間は15分程度です。

絵巻の制作年代は明治初期と考えられますが、作者は分かっておりません。

現物は痛みが大変激しく、修復が望まれています。LD化された事により、安心して鑑賞できます。

沖縄の風俗民俗に関心のある方は、ぜひご覧になる事をお薦め致します。

(情報サービス課 参考係)

OPACサービス再開

今年2月からシステム作業の為にしばらく休止していましたがOPACサービスは、作業も無事に終わり、KUICの利用開始に合わせて4/18(月)から再び学内向けサービスを始めました。

利用者の皆様には大変ご迷惑をお掛けしましたが、作業ではデータの充実を図るためにプログラムの修正や追加、全データの再作成、データ更新のシステム化等を行いました。データ更新は当面、週に1回程度を予定しています。検索方法は以前と変わっておりませんが、疑問の点などございましたら情報サービス課参考係(内線2227)へお尋ね下さい。

(情報管理課 目録係)

本学教官寄贈著書紹介

(中央図書館)

西成彦助教授(文・比較文学)

ラフカディオ・ハーンの耳

西成彦著 岩波書店 1993. 2

マゾヒズムと警察

西成彦著 筑摩書房 1988.10

象

スワヴォーミル・ロージェック著 西成彦他共訳

国書刊行会 1991. 2

ラフカディオ・ハーン再考 百年後の熊本から

熊本大学小泉八雲研究会編 恒文社 1993.10

巨海玄道助教授(養・物理)

Transport and Thermal Properties of f-Electron Systems.

Edited by G. Oomi, H. Fujii and T. Fujita

Plenum Press c1993

図書館カレンダー

(平成6年4月～平成6年9月)

	4月		5月		6月		7月		8月		9月	
1	金	○	日	●	水	◎	金	◎	月	○	木	○
2	土	●	月	◎	木	◎	土	◇	火	○	金	○
3	日	●	火	● 憲法記念日	金	◎	日	●	水	○	土	●
4	月	○	水	● 国民の休日	土	◇	月	◎	木	○	日	●
5	火	○	木	● 子供の日	日	●	火	◎	金	○	月	○
6	水	○	金	◎	月	◎	水	◎	土	●	火	○
7	木	○	土	◇	火	◎	木	◎	日	●	水	○
8	金	○	日	●	水	◎	金	◎	月	○	木	○
9	土	●	月	◎	木	◎	土	◇	火	○	金	○
10	日	●	火	◎	金	◎	日	●	水	○	土	●
11	月	◎	水	◎	土	◇	月	○	木	○	日	●
12	火	◎	木	◎	日	●	火	○	金	○	月	◎
13	水	◎	金	◎	月	◎	水	○	土	●	火	◎
14	木	◎	土	◇	火	◎	木	○	日	●	水	◎
15	金	◎	日	●	水	中・薬◎ 医●**	金	○	月	○	木	● 敬老の日
16	土	◇	月	◎	木	◎	土	●	火	○	金	◎
17	日	●	火	◎	金	◎	日	●	水	中・薬○ 医●**	土	◇
18	月	◎	水	中・薬◎ 医●**	土	◇	月	○	木	○	日	●
19	火	○	木	◎	日	●	火	○	金	○	月	◎
20	水	中・薬◎ 医●**	金	◎	月	◎	水	中・薬○ 医●**	土	●	火	◎
21	木	◎	土	◇	火	◎	木	○	日	●	水	中・薬◎ 医●**
22	金	◎	日	●	水	◎	金	○	月	○	木	◎
23	土	◇	月	◎	木	中● 医・薬◎	土	●	火	○	金	● 秋分の日
24	日	●	火	◎	金	◎	日	●	水	中・医○ 薬●	土	◇
25	月	◎	水	中・医◎ 薬●	土	◇	月	○	木	中● 医・薬○	日	●
26	火	◎	木	中● 医・薬◎	日	●	火	○	金	○	月	◎
27	水	◎	金	◎	月	◎	水	○	土	●	火	◎
28	木	中● 医・薬◎	土	◇	火	◎	木	中● 医・薬○	日	●	水	◎
29	金	● みどりの日	日	●	水	◎	金	○	月	○	木	◎
30	土	◇	月	◎	木	◎	土	●	火	○	金	◎
31			火	◎			日	●	水	○		

◎開館日(夜間開館あり)

○開館日(夜間開館なし)

◇土曜開館日

●休館日

中：中央館

医：医学部分館

薬：薬学部分館

🕒 開館時間	
◎	中・薬 9:00～20:00 医 9:00～21:00
○	中・医・薬 9:00～17:00
◇	中 10:00～16:00 医・薬 9:00～15:00

春季休業期間 4月 1日(金)～ 4月10日(日)
夏季休業期間 7月11日(月)～ 9月10日(土)

注 臨時に休館するときや、開館時間を変更するときは掲示します。

●*については、17:00～21:00の間、開館します。

日誌（平成6.1.1～4.30）

- 1. 6 附属図書館係長会議
- 1. 12 学内LAN建設専門委員会
- 1. 18 古典籍研修会
- 1. 18 平成5年度国立大学附属図書館事務部長会議（於横浜）
- 2. 7 附属図書館委員会
- 2. 8 学内LAN建設専門委員会
- 2. 10 附属図書館係長会議
- 2. 15 古典籍研修会
- 3. 3 附属図書館係長会議
- 3. 10 資料保存に関するワーキング・グループ会議（於福岡）
- 3. 22 附属図書館委員会
- 4. 12 古典籍研修会
- 4. 14 附属図書館係長会議
- 4. 18 情報ネットワークシステム運営委員会
- 4. 21 第24回九州地区国立大学図書館協議会（於宮崎）
- 4. 22 第45回九州地区大学図書館協議会（於宮崎）
- 4. 26 古典籍研修会

- 平成6.4.1 経理部経理課共済組合係長
島 増 男
情報管理課総務係長へ配置換
- 〃 情報管理課目録係
林 田 善 美
医学部分館整理係へ配置換
- 〃 医学部分館整理係
濱 崎 千 雅
医療技術短期大学部会計係（図書室）へ配置換
- 〃 医学部分館運用係
秋 吉 陽一郎
情報管理課受入係へ配置換
- 〃 経理部経理課収入係
島 本 真理子
情報管理課総務係へ配置換
- 〃 医療技術短期大学部会計係（図書室）
楠 本 昌 代
医学部分館運用係へ配置換
- 〃 情報管理課受入係
吉 村 貴 子
情報サービス課参考係へ配置換
- 〃 情報サービス課参考係
米 田 幸 子
情報管理課目録係へ配置換
- 〃 情報管理課受入係
原 田 繁 子
情報管理課目録係へ配置換
- 〃 情報管理課目録係
水 本 美智子
情報管理課受入係へ配置換
- 平成6.3.31 情報管理課総務係庶務主任
山 本 敦 子
退職

図書館委員の交替

平成6.3.31	任期満了	法学部	若曾根 健 治
〃	〃	理学部	實 政 勲
〃	〃	教養部	芦 田 徹 郎
平成6.4.1	就 任	法学部	良 永 彌太郎
〃	〃	理学部	小 畑 正 明
〃	〃	教養部	福 澤 清

人事異動

- 平成6.4.1 情報管理課長
田 尻 英 雄
山口大学附属図書館事務部長へ転出
- 〃 三重大学附属図書館情報サービス課長
石 井 保 廣
情報管理課長へ転入
- 〃 情報管理課総務係長
野 田 憲 之
医学部用度係長へ配置換

東光原—熊本大学附属図書館報—第8号
平成6年6月
編集発行 熊本大学附属図書館
〒860 熊本市黒髪2丁目40番1号
TEL (096) 344-2111
FAX (096) 345-5240